

横芝の碑

(その八十三)

昔の路を教えている

坂田城趾の地蔵様

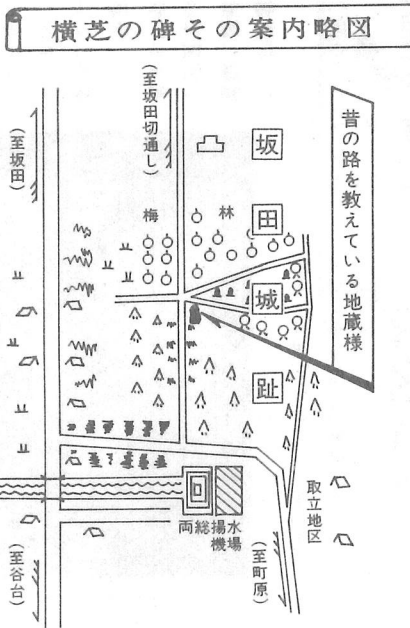
両総用水第二揚水機場をう回して町原方面に通ずる振子坂の中腹から左に折れ、坂田城趾に入る道を通り、両側に立並ぶ松や杉の林を切り抜けると、そこはいわゆる坂田の梅林で、道は四本に岐れま

すが、その路傍に後方の見通しをさえぎるような、深い笹群に囲まれたお地蔵様が建っています。

お地蔵様は、道祖神様や庚申様と同じように、昔から町の角や村の入口、また峠の頂上等に祭られ



▲ 坂田城趾路端の地蔵



その場所に

建っていた

地の中、あるいは特に寄進建立と言ったものはありますが、路傍の石仏という形の地蔵様はほとんど見かけません。そうした意味で、この坂田城趾の路端に建っている地蔵様は珍しい存在と言っています。

実は五年前前に観梅の路すがらこの地蔵様の前を通ったことがありますが、その時は近くに墓地もありましたので「墓地の中に建っていたのを、何かの都合で一時ここに建てたのだらう。」位に考えて見過してしまっていたのですが、最近ある用事で再びこの前を通り

安脚のお姿

お地蔵様は背丈が約1m、蓮華の台座に乗って、右手に錫杖、左手に宝珠を持った姿の立像です。この姿は、六地藏(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、に分身されて衆生を教化されるという)の中の地獄道能化の姿、とされています(広辞苑による)が、一般庶民の間では、この姿は地蔵様がこの杖をついてどこにも出かけ、衆生の苦を救い、幸を与えて下さる安脚の姿である、という考えが定着しているようです。そのことは私達が見かける一人立の地蔵様のほとんどがこの姿であることでも判ると思います。台座には、末尾は磨滅して判りませんが、安永五年(一七七六)の四文字は判り読みとれました。そして念のため近くにある墓地に入って墓石を調べさせて頂きましたが、文化(一八〇四)一八(一八)文政(一八一八)一八(一八三〇)等の年号の墓石は拝見できましたが、それ以前のものには拝見できませんでした。これは墓の中に地蔵様を建てたのではなく、墓の出来たころはすでに地蔵様が建っていたことになるわけ

今振子坂の方からこの地蔵様の

前まで来ますと、何となく墓地に入るために出来た路のように思われるかも知れませんが、この路は坂田の切通しと共に坂田城の主要道路で、廃城の後もそのまま残り城趾の中心を突抜いて、ここから取立および小堤方面に通ずる分岐点になっていたはずですが、そして安永五年(一七七六)に信仰厚い人々が建てたのがこの路傍の地蔵様だと思えます。

近くの畑で働いていた人の話では「地蔵様は昔からここに建っていた、葬式の時には六道回りを地蔵様の前で見かける。」ということでした。六道回りは、埋葬の前に地蔵様に死後の救済を願う儀式である。と聞いておりますので、墓地の入口に当る辻に建てた昔の路を教えていた地蔵様は、いつか後生安樂を願う人々の心の中に、六道回りの地蔵様として存在するようになったのだと思います。

◎(写真は、その地蔵様で、すぐ足下の台座は、どうやら蓮華台座を逆にしてあるようです。地蔵様のすぐ左からは舗装道路で、振子坂に通じています。)

町文化財審議会委員

小沢春光氏寄稿

